03

「鉄の山ができました」国産芝刈機開発の苦労話

昨年PGMがデモンストレーションした無人芝刈機

「日本の芝は海外と比べて硬く、すぐに刃が丸くなる」

そう語るのは2021年からゴルフ場フェアウェイ用の無人芝刈機を本格発売した共栄社（愛知県豊川市）の林秀訓社長。同氏は4代目社長で創業は1910年。100年以上続く老舗企業で、養蚕用の機械製造から始まり、1922年に人力の脱穀機を製造販売。以後、耕運機など農業用機械メーカーの道を歩む。

「だけど農業用機械の分野にヤンマーなど大手が参入して、当社の成長速度が鈍化したと聞いています。それで1960年代、ゴルフ場の造成ラッシュを受けて新規事業を立ち上げる必要もあり、ゴルフ場の芝刈機の製造を始めました」

田畑の耕運機はギアを使っており、その点もゴルフ場の芝刈機と近い構造だったこともゴルフ市場に参入した理由のひとつ。

1959年に有人でグリーンの芝を刈るグリーンモア『LM2』を発売したが、開発には大きな問題があり、それが冒頭の台詞である。

「当時、海外製の芝刈機も輸入されていましたが、日本の芝は硬く、すぐに刃先が丸くなって芝が刈れなくなるんです。それで当社は様々な素材を製鉄所から取り寄せて、自社で刃を製造しました。何度もテストを繰り返したことで、工場の外には鉄の山ができたそうです（笑）」

金属の素材を叩いて曲げてらせん状に成型し、錆びを落として、職人が研磨する。そのため、社内に工場も立ち上げたという。

「その甲斐もあって、今では全国のゴルフ場で芝刈機を始め、様々な機械を導入してもらっています。現在売上の7割がゴルフ場です」

その用途はゴルフ場だけではなく、公園やサッカー場などスポーツグラウンドに幅広く使われている。

ゴルフ場用の機械販売が成功して、2005年には米法人を設立、その2年後に英国に子会社を設立するなどで、現在では内外の売上比率が半々になって世界を股にかける企業に成長。そんな折、ソフトウエアの会社から、芝刈機を無人化するソフトウエアの提案があったという。

「13年前のことです。当時から少子高齢化による将来の労働力不足が叫ばれていましたが、ゴルフ場に話を聞くと一部からは『ゴルフ場の仕事を奪う気か！』と言われたこともあるんですよ。当時は時代が追いついていなかったんですね」

時代が早すぎたのか、そのソフトウエア会社が無人化システムの開発から撤退してしまった。事業撤退した会社から機械を制御するシステム開発者と測位システム開発者の2名に転籍してもらい、無人芝刈機の開発を社内で進めてきたという。

その後、2019年からゴルフ場で無人芝刈機のテスト導入を開始。ゴルフ場運営大手のPGMが着目して、2019年4月から同社のコースでテスト導入。現在は全国で15台ほどが稼働している。

「今後の予定は、2025年に無人バンカーレーキのテスト販売、2026年には無人グリーン芝刈機のテスト販売を計画しています」

周知のように、人手不足はゴルフ業界だけではなく、全産業的な課題だが、特にゴルフ場のコース管理は労働環境の厳しさもあって人材確保に頭を悩ませている。113年の老舗企業・共栄社は、4代にわたり時代の変化に対応しながら無人芝刈機に辿り着いた。時代が、ようやく追いついてきたと言える。（吉村）